

I. 総 説

1. 本 県 管 轄 の 沿 革

古 代

わが国土には約 6,000 年前から原日本人ともいべき人種が住んでいて、新石器時代の文化を開いた。

千葉県には新石器時代の遺跡が、東京湾斜面の西部地方、利根川流域殊に手賀、印旛の二沼をめぐる北部地域、館山湾から鴨川に至る低地を中心として約 200 か所あり、その中 100 近くの貝塚があつて、石鏃等の石器類や、縄文式土器、或は骨角製の釣針等を出土し、又堅穴住居も発掘されて、太古から多くの住民が狩猟、漁撈の生活を営んでいたことを物語っている。

前 1 世紀頃から、弥生式土器の文化が西日本から東日本に波及し、次第に農耕生活に進んだのであるが、その弥生式土器もまた県内各地から発見される。

3, 4 世紀の頃、大和朝廷の国家統一が成り、東方蝦夷鎮定のためと思われる経津主命の香取鎮座があつて、この方面が次第に開発され、また忌部氏は四国の阿波から黒潮に乗つて安房に移住し、祖神太玉命を祀つて安房神社を建て、麻と穀とを植え、麻がとくによく生育したので、総（ふさ）の名がおこつた。国造は須恵、馬來田、伊甚、上海上、菊麻、武社、安房に置かれて中央との連けいは密であつた。こうした古代房総の開発は 5 世紀を最盛期とする高塚式古墳が約 150 か所もあり、東葛、千葉、市原、君津の 4 郡と香取、印旛の 2 郡を中心に分布して、金属の遺物を出すことから理解される。

上 代

大化改新以後、安房、上総、下総に国司が任命され、蝦夷経営の要地として軍団が設けられ、駅の制度もかなり整つていた。奈良時代、安房、上総、下総の三国にそれぞれ国分寺が建立されて、地方文化の中心となつた。現在国分寺跡から発見される瓦は芸術的にも技術的にも優秀さを示している。又穀物や麻の栽培が盛となり、特に良質の麻布を調布、庸布として多く貢献した。

平安時代、地方政治が紊乱して、天慶年間平将門の乱が起り、房総の地は稍疲弊した。次いで平忠常、土気大椎城に拠つて叛したが、源頼信に降り、のち赦されて上総介に任せられ、子孫は前九年、後三年の両役に軍功があつて両総の権介となり、千葉氏、上総氏として権威を両総に振つた。

中 世

源頼朝鎌倉に幕府を開くに先立つて、千葉常胤、上総広常の功あずかつて力あり、安房の安西、丸、神余、東条の諸氏と共に安堵の状を得てそれぞれ房総の所領を治めた。北条、吉野の両時代を経て、室町戦国時代となれば、安房の里見をはじめ、千葉、正木、鎗田、土岐、武田等の諸氏は何れも中央政権の争奪戦や、関東管領の対立抗争の渦中に巻きこまれて戦乱を事としたので、房総の地は四分五裂して、人民は大いに苦しんだ。この間郷土の傑僧日蓮の唱えた法華宗が広く信仰された。

近 世

秀吉が北条氏を征して関東の地を家康に与え、次いで家康江戸に幕府を開くや、房総の地は膝下として重要であるため、或は直領を置き、或は佐倉藩をはじめ譜代の小藩を分立せしめて大同団結を禁じたので、文字通り徳川氏藩屏の地となつた初期には 9 藩、幕末には 16 藩、明治初年には 24 藩であつた。この間房総の開墾事業は進み、十六島の開拓、樺海干拓約 2,800 町歩、手賀沼疎水の開通、印旛沼の干拓計画などあつて耕地が大いに拡張され、享保年間には青木昆陽によつて甘藷が栽培され、生産は次第に増加した。又行徳を主として各地に塩田が開発され、これが一因となつて、野田、銚子の醬油醸造業が発達し、江戸はもとより全国に名声をうたわれるに至つた。

現 代

明治元年、王政復古の大業成るや、上総安房県と下総県とがおかれ、2 年には葛飾県と宮谷県とが新設され、同年 6 月藩籍奉還によつて旧藩主は藩知事となり、4 年 7 月、廃藩置県によつて県となつた。安房では館山県ほか 3 県、上総は大多喜県ほか 10 県、下総は佐倉県のほか 6 県、更に同年 11 月改めて上総、安房両国を合して木更津県を、下総国に印旛県をおき、6 年 6 月木更津、印旛の両県を廃して千葉県となし、県庁を千葉町においた。8 年 5 月、新治県所管の香取、匝瑳、海上の 3 郡が千葉県の管地となり、7 月には葛飾郡の一部を埼玉県と東京府に、香取郡の一部を茨城県に割いて、江戸川、利根川を境界とする現在の境域が決定した。爾後本県は首都の隣県として、明治、大正、昭和と県勢愈々振い現在に至つた。